

《洛阳名园记》与兼六园

尹 漠胤 *

霏霏细雨中，来到日本三大名园之首的兼六园。偌大园中，游客稀少，静谧而安详。郁郁葱葱的草木，默然在春雨中，层次分明的各种植物，在雨露的润泽中，浓淡疏密地流泻着绿色旋律。蓊郁参天的古木，如阅尽时间的沧桑老者，矍眊风骨地傲立在园中。空寂的兼六园，簌簌雨滴，似历史回音，如丝如缕，万物生命，尽在雨中。

沿幽邃小径在寂寥园中寻迹而走。高低错落的树木，远近相映成一幅宏阔无界、层叠有致的自然景观。置身园中，如在辽远的山野，清苍沁人心脾；又似潜身在山水画卷，穿行于墨趣空间。沿一条溪水溯源而走，潺潺流水，缓缓步韵，苍古意境，引人怀想。在这座典雅诗意的兼六园，的确蕴藉着一个年代久远的建园故事。

兼六园始建于加贺第五代藩主前田纲纪时代，漫长的建园工程，竟延续了 170 多年。直到第十二代藩主前田齐泰时期才告完成。这座耗资巨大，付出前田家族几代人毕生精力的兼六园，其最初起意，竟然缘于前田纲纪的一个梦想。这梦想来自一衣带水的中国宋代诗人李格非的一篇《洛阳名园记》，具体说就是文中“宏大、幽邃、人力、苍古、水泉、眺望”这六个词汇，深深地打动了前田纲纪的心扉，令他刻骨铭心陶醉其中。这六个词汇，使他最终做出了一个家族决定，要在自己故乡日本金

泽建造一座园林，将李格非《洛阳名园记》六个经典意境，再现于这园中。

漫漫 170 多年间，前田家族将这一建园工程，奉为家族的使命与寄托。矢志不移、前赴后继修建着这座园林。精心设计、精致施工，一丝不苟地誓将中国园林的精髓再现于园中，最终历经四代藩主才告完工。可以想象，这座园林竣工时，十二代藩主前田齐泰流连于园中时，一定感慨万千地想起了祖先前田纲纪，当年萦绕在他脑海的一个梦想，历经家族一百多年的努力，终于将梦想化为了现实。更让前田家齐泰感到欣慰的是，令前田纲纪心驰神往的洛阳名园“宏大、幽邃、人力、苍古、水泉、眺望”的意境，已经完美地再现于这座日本园林。为告慰前田纲纪的这一夙愿，更为明以出处，前田齐泰自豪地将这座园林命名为兼六园。

吟咏着这 12 个字，我漫步在兼六园，心中同样感慨万千。300 多年前，前田纲纪为了在故土再现中华文化，将这一建园行动，以生命传承的方式，奉为一种家族信念，不辱使命地世代延续直至完成。从前田家族修建兼六园的行为，让人看到了日本学习先进文化的执着精神。如今，中国人来到京都、奈良，见到保存完好的古代建筑，不禁感叹在日本竟完好留存着精美的中国唐代建筑。而在中华文化源头的古都洛阳、西安、开封、北京，国人却只能

* 作家

看到汉魏残存的石刻、唐朝大明宫的遗址、北宋的建筑遗迹、明朝断臂残垣的城墙……古老的中国，博大精深的中华文明，曾经深刻地影响着世界历史文化。然而，盛世朝代建起的都城、宫殿、园林……却无不在一次次改朝换代中毁于人祸。让后人无奈地徘徊在昔日王朝宏伟遗址上惆怅叹息，聆听着空旷遗迹无语的历史回声。中国历史的轮回，不知为什么总是在废墟上开始。这不能不说是中华民族历史的悲哀。

而这座凝聚着前田家族心力的兼六园，建成至今又走过了百多年的历史时光，却保存得非常完好。漫漫岁月，兼六园在沧桑中浓缩着自然，洞悉着时光，沉淀着历史，古意昂然地眺望着古今世界。目睹着园中的一石、一木、一溪、一亭，我仿佛听到了前田纲纪执著的脚步，阅尽历史写下《洛阳名园记》的李格非的慨然叹息。

缘路而行，来到一处别致的木质建筑，路牌所示“时雨亭”，正是此时此刻、此雨此情的写照。步入这座典雅的日式建筑，房间由一道道纸制隔扇屏蔽着，主人引我们到一个空间，待在榻榻米坐定，一位身着淡雅和服的中年妇人端上茶盏、点心，依次摆在我们面前。豆绿色的茶盏，漾现着碧绿的抹茶，一片竹制托板，静息着一束枫叶形的糕点，诗意诱人。望着眼前的抹茶，不禁又使我心系遥远。抹茶同样源自于中国，兴于盛唐，鼎盛于宋，已有一千多年历史。明朝时，冲泡茶兴起，抹茶渐渐退隐。失传于中国的抹茶，却在日本得以传承至今，且被发扬光大为日本的国粹。为我们摆好茶盏，妇人款款走到对面，双膝跪下，将一道隔扇缓缓拉开，随着隔扇的开启，园中一角景色，如一幅青绿山水，悠然垂挂于眼前。婀娜娇艳的红杜鹃，悄然绽放于溪畔，一挂冷泉琳琅四溢于石崖，“凡坐此，则一园之胜可拥而有也”。

如今的日本，已是高度发达的现代化国家，但在国家发展和现代生活中，依然保留着鲜明

的民族传统文化传统，对历史古迹、自然生态充满敬畏，这种文化生态意识，已成为了全体国民的共识。在日本民间，藏有大量中国文物。一位在日本多年的朋友，是位文物收藏家。他常年奔波于日本各地，遍访民间藏家，不辞辛劳地搜揽着祖国文物。在四国的一个古董店，他惊喜地发现了一个乾隆年间的狮耳白瓷瓶，一见倾心，但他出多少钱老店主也不卖。几年里，他始终心系着那只瓷瓶，一有机会，便跑去与老店主聊聊收藏，看一眼那个瓷瓶。对中国文物的共同爱好，使他们成为了朋友。时光荏苒，忽然有一天，老店主打来电话，请他去一趟。朋友驾车匆匆赶去，一进门见老店主穿着和服端坐房中，一脸庄重地在等待着他。朋友见此，不知发生了什么事情，打过招呼后，静静坐下望着老店主。老店主双眼凝视着朋友一言不发，好一会儿，他才慢慢起身，步履沉重地走进里面房间，抱着一只木盒走回来，郑重地放在朋友面前，示意朋友将其打开。朋友小心翼翼地解开捆扎木匣的带子，从木匣中将精心包裹的瓷瓶取出，打开包装纸，正是那只他向往已久的狮耳白瓷瓶。老者用深情的目光凝视着那只瓷瓶，声音低沉地说：“看得出，你非常喜欢它。说心里话，我更喜欢它，这只瓷瓶已陪伴我60多年了。如今我年事已高，不想让这件中国艺术品没人照看，今天我将它交你保存吧！”朋友闻听此言，肃然起敬地面对老者深深地鞠了一躬。在老者的示意下，他将那瓷瓶重新包裹好，重新放入木匣捆扎好，放在老店主面前。老店主望着木匣，慢慢躬下身子向其深深地一拜，然后郑重地对朋友说：“现在你可以将它带走了。”朋友轻轻站起身，向老店主鞠躬致谢后，用手提起木匣。就在这一刻，老店主“啊”地大叫一声。朋友一惊，赶紧放下木匣，疑惑地望着老店主，不知发生了什么事。老店主满脸怒气地说：“你怎么可以这样对待它！”朋友意识到自己的不敬举动，赶紧回转身，对着木匣深深鞠了一躬，然后恭

恭敬地将木匣捧在怀中，在老店主的目送下慢慢退出房间。

听完朋友的讲述，我在他家中一个日式房间，见到了那只瓷瓶。瓷瓶放置在一个红木条案上，器形不大，造型极为精美，古朴的白釉，莹莹地发着迷人的光泽，蕴藉着它独特的历史身世，静静地端坐在那里。面对瓷瓶，我好像也面对着那位老店主，心里充满着复杂情感。5000年中华历史文化，创造了世界上最辉煌的中华艺术。在漫长的历史中，许多日本人渡海赴中国来学习，中国文化曾深刻影响着日本文化。前田家族百多年的建园史，老店主对中国瓷瓶的珍爱敬重，无不体现着日本对中国文化的尊重。这种对文化的尊重，已化为日本国民的文化心态，成为了日本文化中重要的组成部分。当年钱钟书先生到日本讲学，回来后不无感慨地说：“到日本来讲学，是很大胆的举动。就算一个中国学者来讲他的本国学问，他虽然不必通身是胆，也得有很大的胆。理由很明白简单，日本对中国文化各个方面的卓越研究是世界公认的。”

历史云烟中的古都洛阳，郁郁邙山，滔滔洛水，山河依旧。让前田家族敬重的《洛阳名园记》作者李格非，在其文中还写下了一段痛心疾首发人深醒的文字：“公卿贵戚开馆列第于东都者，号千有余邸；及其乱离，继以五季之酷。其池塘竹树，兵车蹂践，废而为丘墟；高亭大榭，烟火焚燎，化而为灰烬，与唐共灭而俱亡者，无余处矣。予故尝曰：园圃之兴废，洛阳盛衰之候也。且天下之治乱，候于洛阳之盛衰而知；洛阳之盛衰，候于园圃之废兴而得，则《名园记》之作，予岂徒然哉？”

《洛阳名园记》中极尽华美的园林，已在历史战乱中化为了遗迹。而浓缩着洛阳名园“宏大、幽邃、人力、苍古、水泉、眺望”修建起的兼六园，却在日本展现着中国园林优雅风姿、诗意辉煌，蕴含经典地屹立在异国的土地上。一个不尊重祖国文化的民族，你怎么能指望他

爱自己的国家呢。日本国学大师内藤湖南曾把中国传统文化当作衣服比喻说：“虽说是从中国借来的衣服，但当中国人脱得精光时，日本人身上总还有一件穿在身上没有脱下。”

中华博大精深的文化，可以经典浓缩为六个词汇感动世界，证明着这个民族的文化是多么伟大而充满魅力。而面对历经170多年锲而不舍地将六个词汇化为“兼六园”的民族，我们同样没有理由轻视他！

创造过伟大文化的民族，内心必然是开放、平和、自信的。中国拥有过为世人敬仰的辉煌历史，也曾以豪迈的气度、博大的胸襟，向世界敞开国门传播自己的文化。然而，由于文化的衰落，思想禁锢闭关锁国，导致近代以来国家内忧外患。如今中国正在重新崛起，我们将以什么样的民族心态面对世界，将决定着中国的未来。民族仇恨是一种持续痛苦的精神折磨，改变这种精神状态的最好选择，就是正视历史面向未来，吸收世界上一切先进文化，奋发有为地融入世界。

华夏文明发祥地洛阳，是历史上建都最早、朝代最多的一座城市。“中国”、“华夏”称谓由此而诞生。隋炀帝时，便开凿大运河，形成了南北水路大通道，洛阳随成为“丝绸之路”东端的起点，由此可直抵地中海东岸明驼宛马，络绎不绝。洛阳曾经圣贤云集，人文荟萃，文化鼎盛。

如今在洛水北岸，淹没于历史烽烟的上阳宫，含蕴着中华千年遗韵，再次屹立在古老的洛阳大地上。当年高宗居此听政，武则天还政于此的观风殿，面水而立，仿佛在静静谛听着滔滔伊水，无言东去的历史回声。龙门峡谷，万佛端庄。古都洛阳曾承载着泱泱中华雄浑大气、盛世辉煌、内乱纷争、屈辱衰落、涅槃重生。绵绵洛水中有凯旋、有悲凉、有无奈、有冷暖……一切都辉映在中华历史天幕上。

今年适逢中日甲午战争120周年，经历了重重劫难的中华民族，已屹立于世界之林。面

对新世纪风云变幻中的世界，我们只有全民共识、上下同心、克勤克俭、兢兢业业、一丝不苟地做好每一件事情，中华民族才能重拾历史辉煌，完成民族复兴大业。

历史在诉说、山河在倾听……

『洛陽名園記』と兼六園

尹 漢胤（文） 劉 利国*、祝 麗君**（訳）

細雨がちらちら舞っている日に、日本三名園の筆頭とされている兼六園に来た。広い庭園には、観光客が少なく、静かで穏やかであった。うっそうとしている草木は春雨に沈黙し、色とりどりの植物は雨露の恵みで、緑のメロディーを奏でる。生い茂る老木は世の転変を味わい尽くした老人のように、狷介孤高に庭園の中に空高く聳え立っている。しとしとと降っている雨は歴史のこだまの如く、糸のように細く繋がっていて、あらゆる生命を育む。

私は幽邃の細道に沿って、寂寥たる庭園を歩いて行く。高低不揃いの木々は遠近を問わず並び、果てしなく広く、幾重にも重なる自然風景となる。庭園に身を置くと、奥深くひっそりとしている山野の緑に心染み渡るような感じがする。そしてまた、山水画の水墨の空間を行ったり来たりするような心地に襲われる。小川に沿って遡って歩く。さらさらと流れている水の音、ゆるゆると進んでいる足取りなど、このような蒼古たる雰囲気は、懐旧の情を誘う。この詩的趣に富んでいる兼六園には代々藩主たちの強い思いを知ることができる築庭物語が伝えられている。

兼六園の造園は加賀五代藩主前田綱紀に始まり、百七十年あまりを費やし、十三代藩主前田斉泰の時代によりやく完成されたとい

う。前田家数代の藩主たちは大金をかけ、畢生の力を注いで兼六園を造った。造園の縁起は最初前田綱紀の夢から芽生えたと言われている。綱紀は日本と一衣帯水の隣国である中国宋代の詩人李格非の書いた『洛陽名園記』を読み、その中の「宏大」「幽邃」「人力」「蒼古」「水泉」「眺望」という六つの言葉に深く感動し、魅了された。そこで彼は故郷の金沢で『洛陽名園記』に書かれてある屈指の美を造園によって体現させることを決心した。

悠々たる百七十年あまりの間、造園を祖先に対する使命、そして後世への希望として、前田家は代々絶え間なく、この事業に畢生の力を尽くしていた。彼らは心を込めて設計し丹念に施工し、少したりとも手を抜かず、中国庭園の真髄を再現させようと、四代に続く藩主の努力を経てようやく完成した。庭園が完成した際、庭園を一望した十三代藩主前田斉泰は、きっと感無量な気持ちで先祖前田綱紀に思いを馳せたであろう。綱紀が抱いた夢は、先人たちの百年以上にわたる努力で、ようやく実現された。もっとも斉泰を喜ばせたのは、綱紀の追い求めた「宏大」「幽邃」「人力」「蒼古」「水泉」「眺望」という洛陽名園の境地をこの庭園が全て兼ね備えたことである。綱紀の宿願が叶ったことを記念するため

* 大連外国語大学 教授、日本語学院前院長

** 大連外国語大学院生

に、またその由来を忘れぬために、斉泰はこの庭園を「兼六園」と名付けた。

例の十二文字を噛み締めながら、兼六園をそぞろ歩きすると、感慨深い気持ちになる。故郷で中華文化を再現させるために、三百年前、綱紀はこの造園事業を完成させる事を家の信念とし、脈々と生命を繋ぎながら、この造園作業を行い続けた。前田家の兼六園を造った偉業から、進んだ文化を見習おうとする日本の執着が見られる。今、中国人が京都、奈良で保存されている古代の建物を見るたびに、「日本には中国唐代の素晴らしい建物が保存されているのか」と驚嘆せずにはいられない。ところが、中華文化の源である洛陽、西安、開封、北京などの古都には、漢魏から残存した石刻、唐大明宮の遺跡、北宋の建物の遺跡、明の不完全な城壁しか残っていない。古い中国、広大な中華文明はかつて世界の歴史や文化に深い影響を与えたが、残念ながら、盛代に建てられた都、宮殿、庭園などはほとんど王朝交替の時に壊されてしまった。後世の人たちは昔の王朝の壮大な遺跡を巡り、無言の歴史のこだまを聞きながら嘆息するしかない。何故中国の歴史の輪転を廢墟から始めなければならないのか。これが中華民族史の悲しみだと言わざるを得ないだろう。

前田家の精力を凝集させた兼六園は百年余りの歴史があり、ほぼ完全な状態で保存されている。長い歲月、兼六園は世の移り変わりを味わいながら、自然を濃縮させ、月日を洞察し、歴史を積み重ね、莊嚴な雰囲気になり、古今世界を眺めている。庭園の一石、一木、一水、一亭を見ると、前田綱紀がこだわった足音と、歴史を味わい尽くして『洛陽名園記』を書いた李格非の感嘆が聞こえるような気がする。

道なりに歩いて行くと、風変わりな木造の建物の前に来た。路標に「時雨亭」と書いて

ある。これは雨が降っているこの瞬間そのものを克明に描写しているかのようであった。この上品な日本式の建物に入ってみると、部屋はいくつかの襖で仕切ってあった。管理人の案内で僕らは畳に座った。上品な着物を着た気品のある中年婦人がお茶とお菓子を持ってきてくれ、次々と僕らの前に置いてくれた。緑豆の色の茶器に、青緑の抹茶を、竹製の小皿にカエデの葉の形をしたお菓子を載せてあるのは、詩情が漂い心がひきつけられた。目の前の抹茶を見ながら、悠久の歴史に思いを馳せた。抹茶は元々中国に源を発したもので、盛唐に興り宋の時代に広がり現在に至るまで千年余りの歴史がある。明の時代に、煎茶の流行に伴って、抹茶はだんだん中国から姿が消えた。中国での伝承が絶えた抹茶は日本に受け継がれ発展し、日本独自の文化となった。お茶を持ってきた婦人はゆっくりと向こうに行き、正座した。彼女はゆっくりと襖を開けた。すると、庭園一角の景色が山水画の如く、眼前に広がったように映った。嫺かで艶やかなつじが小川のほとりに悠然と咲いており、ひんやりとした泉の水が崖に勢いよく流れている。「ここに座れば、庭園全ての絶景を目に収めることができる」。

今日、日本は高度な科学技術を有する近代化国家になった。発展の過程においても、または現代生活の中においても、日本は依然として民族の伝統や文化を引き継ぎ守り、祖先の残してくれた歴史や自然に畏敬を抱いている。このような意識は既に、日本国民全体が共有するものとなっている。多くの中国の文物は日本の民衆によって大切にされている。長年日本に暮らす骨董収集家の友人が一人いる。彼は長年苦勞をいとわず日本全国を駆け回って、骨董収集家の元を訪ね、祖国中国の骨董を探している。彼は四国のある古美術屋で乾隆時代の獅子耳の白磁瓶を発見し、気に

入ったのだが、彼がいくらお金を払うと言っても、古美術屋の老年の店主はその瓶を売ってはくれなかった。彼はずっとその瓶に心を引かれ、ここ数年間、何かにつけ何度も古美術屋にそれを見に行き、店主と骨董に関する話を交わした。共に中国の骨董に興味があるので、二人は仲の良い友達となった。月日経ったある日、店主から電話が掛かってきた。友人は急いで車で古美術屋に駆けつけた。部屋に入ると、店主が着物を着て正坐し、落ち着いた重々しい顔で自分を待っているのに気付いた。

訳も分からぬまま友人は挨拶をして、静かに座り込み、店主の方を見た。店主は何も言わずにじっと友人を見つめた。しばらくして店主は立ち上がり、足元が覚束無いながらも奥の間に入り、木箱を持ってきた。彼は厳かにその箱を友人の前に据え置いて、開けるように合図した。友人は慎重に箱を縛った帯を解き、丹念に包まれたほぞを箱から取り出し、包み紙を外した。すると、現れたのはずっと前から所望していた獅子耳の白磁瓶であった。店主は慈愛の眼差しでその瓶を見つめ、低く沈んだ声でこう言った。

「あなたがこの瓶が気に入っているのはよく分る。実を言えば、私はあなたよりも愛着を持っている。この瓶を手に入れてから、もう六十年あまりになった。そして私は年を取った。この中国の芸術品が身を寄せるところがないのは可哀相なことだ。これを大切にしたい。」

それを聞いて、友人は尊敬の念を抱いて店主にお辞儀をした。店主の合図で、彼は瓶を包み箱に入れて帯で縛り、店主の前に置いた。店主はその箱を見て、ゆっくりと腰を曲げ深く拝んだ。

「それでは、お持ち帰りください。」と店主は厳粛に言った。

友人はそっと立ち上がり、店主にお辞儀をして謝意を表した。箱を下げ、帰ろうとした途端、「おい」と店主に大声で呼び止められた。彼はびっくりして、箱を床に置き、訳も分からぬ顔で店主を見た。「何をやっている」と店主は怒った顔で詰め寄った。友人は自分が失礼をしたのに気づき、すぐ向きを変え箱に深くお辞儀をして、箱を恭しく胸に抱き、店主に見送られながらゆっくりと部屋を出た。

友人の話を聞いた後、彼の家和室にあるその瓶を見せてもらった。それは細長い紫檀の机の上に置かれており、それほど大きくなく、造形が素晴らしい。古風で優雅な釉薬が魅力的でつやつやしているうえ、独特の歴史が含まれているかのように見える。その瓶の前にすると、店主と向き合っているような感じがして、神妙な気持ちになる。五千年もある中国の歴史や文化は世界で最も輝かしい芸術を創造した。長い歴史の中で、海を渡って中国に留学した日本人が大勢居り、中華文化は日本文化に深い影響を与えた。前田家百年余りの築庭の歴史も、中国の磁器を大切に尊重する古美術屋の店主の姿も、日本が中華文化を尊重する表れである。この文化への尊重は日本国民の心底に住み着き、日本文化の重要な一部ともなった。ある時、銭鍾書氏が講義のために日本に赴いた。彼は感慨深げに次のように言った。

「日本に行って講義するのは大胆な行為だ。中国の学者として自国の学問を講義するには身を奮い立たせる勇気まではいらないが、度胸は必要だ。なぜなら、日本の中国に関する研究は世界でも認められ、飛び抜けてすぐれているからだ。」

時代の移り変わりを経験した古都洛陽は、青々たる邙山、滔々たる洛水、山も河も変わらない。前田家の敬愛する李格非は、胸を痛め、深く反省した文章を書いた。

「王侯や貴族によって洛陽に建てられた屋敷や庭園は千軒もある。後に、戦乱で散り散りとなり、中国五代の時代に、また酷く破壊された。その中の池、竹林、木々は戦車によって壊され廃墟となり、高い楼閣やあずまやは戦火に燃やし尽くされて灰塵と化し、全ては唐の王朝と共に滅亡して、免れたものは一箇所もなかった。「庭園の興廃は洛陽の盛衰の兆しである。そして、天下の治乱の情勢は洛陽の盛衰状況によって予知でき、洛陽の盛衰の気運は庭園の興廃状態で分かる。私が『洛陽名園記』を書いたのは無駄なことだったのか。」

『洛陽名園記』に書かれた美しい庭園はすでに歴史の戦乱の中に遺跡と化した。洛陽名園の「宏大」、「幽邃」、「人力」、「蒼古」、「水泉」、「眺望」を凝集させて建てられた兼六園は中国庭園の優雅な姿と詩情溢れる輝きを日本で進化させ、異国の土地に屹立している。自国の文化を尊重しない民族に、自分の国家を愛するという望みを託してはならない。名高い日本の国学者の内藤湖南氏は中国の伝統文化を衣服に例えて、次のように言った。

「中国から借りてきたものであったが、中国人はすっかりそれを脱いでしまった。日本人はまずまず一枚を着ている。」

博大な中華文化は六つの言葉に集結され、世界を感動させた。そして、その六つの言葉はこの民族の文化がいかに偉大で魅力に富んでいるかを裏付けている。百七十年間に努力を怠らずに粘り強く造り続け、この六つの言葉を「兼六園」に表した民族を軽視する理由はない。

素晴らしい文化を作り出した民族の心は開放、平和、自信的なものであるに違いない。中国はかつては世に輝く歴史を有するにもかかわらず、堂々たる気迫と博大なる度胸を以って、世界に自国の文化を輸出していた。

しかし、残念ながら、文化の衰退や観念形態の鎖国などによって、国内の憂患と外敵の略奪を持たされたわけである。今や、中国は立ち直りつつあるが、いかなる気迫で世界に向き合うのかが中国の未来を定めるのである。民族の恨みは長続きする精神的痛みである。その精神状態を改善する最もよい選択としては、歴史を正しく認識し、未来に視点を置き、あらゆる先進文化を吸収し、身を奮って世界に溶け込むようにすることである。

華夏文明の発祥地の一つである洛陽は、我が国歴史上初めて都を定めた地域でもあれば、そこに建都した王朝が最も多い都市でもある。「中国」、「華夏」という呼称はここから始まったのだ。隋の煬帝の時代に、大運河を作り始め南北を貫く水運通路を成した。洛陽はシルクロードの東の起点であり、そこから直接地中海東岸に達することができる。明駱宛馬（明駱とは長距離を歩くのが得意なラクダであり、宛馬とは古代西域大宛に産する名馬である）は、ひっきりなしに行き来していた。洛陽は聖賢が雲集し、物産が豊富で、文化が繁栄していた。

今では、洛水の北岸には、戦災などに姿を消された上陽宮はあらためて作り直され、千年もある風情を見せている。唐の高宗はある時期ここで国政を行い、女帝の武則天が国政奉還の觀風殿も洛水に面して滔々と流れる水の音と黙々と過ぎ去る歴史の残響を傾聴する。龍門峡谷の数万体の仏像は重々しく鎮座している。堂々たる中国の雄大な勢い、繁栄や輝き、内乱や紛争、屈辱や衰退、復興や再生は全てこの古都に残っている。悠々たる歴史の中に、喜びもあれば悲しみもある。また、変化せぬともあれば、世の移り変わりもある。これらはすべて中国の歴史の大空に刻まれている。今年（2014年）は日清戦争百二十周年である。しばしば苦難を乗り越えた中華民族

は再び世界に屹立している。変転窮まりない世界情勢を前にして、我々国民が共に勤勉で儉約し、着実に歩を進め、何事も手を抜いてはいけない。でなければ、中華民族は繁栄を取り戻し、復興の事業を実現することはできないであろう。

歴史は訴えつづけ、山河は耳を傾けている。

—— 尹 漢胤著『歳月の痕跡』（作家出版社、2014）より

作者：尹 漢胤

1954 年生まれ。中国作家協会美創作連絡部副主任、中国少数民族文学研究会副会長。長年、中国少数民族研究に携わり、『中国民族文学史』『建国五十年間少数民族文学名作文庫』『中国当代少数民族翻訳作品集』を編集。著書に随筆集『歳月の痕跡』テレビドラマ脚本『スケボー少年』などがある。